

文学分野

古代世界における学派・宗派の
成立と < 異 > 意識の形成

研究班代表

赤松 明彦

はじめに

赤松 明彦

我々の研究班では、古代世界、特に古代インド世界において、社会的・地理的・文化的に、〈他者〉の観念がどのように形成されてきたか、またそれがどのように表現されているか、ということに関心をもってこれまで活動を続けてきた。以下に示すのは、その成果の一部である。我々の研究班は、通称を VAADA と称している。Vāda とは、サンスクリット語で「論争」(argument) を意味する。インドの思想史を特徴づけるのは、直線的な思想の発展ではなく、様々な学派がそれぞれの学説を護持し発展させる複線的伝承の歴史である。そこに見られるのは、個人における〈自〉と〈他〉の意識というよりは、学派において伝承され、「論争」によって形成される〈正統〉と〈異端〉の意識といった方がよいかもしい。そのような意識のあり方を、具体的に探るために、我々が選んだ方法は、いくつかのテキストを取り上げてそれを読解するという文献学の方法である。ここに示すのは、これまでに行われた共同研究会 = ゼミ形式の読書会の成果である。

1. 『アーガマ・ダンバラ (聖典騒動)』 読解。

『アーガマ・ダンバラ』は、9世紀後半にカシミールで活躍した思想家ジャヤンタの作品として知られる劇作品である。「六つの見解の劇」という別名が示すように、諸学派・諸宗派の論争が舞台上で繰り広げられる「論争劇」である。この作品については、そのあらすじも含めて、このテキストの最初の校訂者の1人である V・ラガヴァン(Raghavan) による解説がある。有用と考え訳出しておいたので参照されたい。本研究班では、このテキストの共同研究会を、ペンシルヴェニア大学の Harunaga Isaacson 博士を座長に迎えて2003年の5月と6月に実施した。ここには、この研究会に終始参加した片岡啓氏の手になる序幕と第一幕の翻訳を載せる。片岡氏の注記にあるように、このテキストは、現

在ブダペストの Csaba Dezsö 氏によって、写本に基づく批判校訂テキストの作成と英訳が進められている。我々は、Isaacson 博士を通じて、この最新の成果である校訂テキストを使用することができた。ただし、テキストの確定や解釈など文献学的研究の成果については、Dezsö 氏による出版を待たなければならないので、ここでは、注記も最小限に留められている。

2. 『シャッド・ダルシャナ・サムツチャヤ（六派哲学集成）』読解。

このテキストは、9世紀ジャイナ教の思想家ハリバドラが著したものである。後世のグナラトナがこれに注をつけたテキスト（『タルカラハスヤ・ディーピカー』）を、研究会では読解の対象としている。このテキストについては Newsletter 第2号（<http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/vaada/newsletter.html/>）で簡単に解説しているので、参照されたい。このテキストの研究会は、ネットワーク上で行った。メーリング・リストによる訳・注の公開と意見の交換という形をとったが、現在、Web 上での書き込みシステムを利用したオンライン研究会を、実験的に実施している。このシステムは、山田篤氏によって開発された。人文学分野における、XML によるテキスト作成・公開の試みは、TEI をはじめ先端的ないくつかのグループによって、現在ネットワーク上で様々ななされている。今後は、これらの成果をも利用しつつ、画期的なオンライン研究会の試みを軌道にのせたい。ここに示したのは、徳永宗雄博士担当の序章の一部である。徳永博士の英訳・訳注をもとに、ネットワークを通じて議論がやり取りされた。ここでも最も熱心に議論を展開したのが、Isaacson 博士であった。特にその名を明記しておきたい。

読解の対象にした二つのテキストは、前者が正統フラフマニズムの他学派への態度、後者が非正統派（ジャイナ教）からの諸哲学理解の試み、を表すものと言える。V・ラガヴァンは、この序説で、そこに「寛容の精神」(Tolerance)を見出そうとしているが、インド哲学の泰斗 P・ハッカーは、これを Inklusivismus（包摂主義）と名づけ、「寛容」とは根本的に異なるものとした。「ヒンドゥーとは何か」を考える上でも、重要な問題意識であり、VAADA における今後の研究課題としたい。